LC
りぽーと
Vol. 34

〒663-8558　西宮市池開町6-46
武庫川女子大学言語文化研究所
TEL　0798(45)3536
FAX　0798(45)3574
http://www.mukogawa-u.ac.jp/~ILC

ことばのサロン　&　言語文化セミナー

言語文化研究所が主催する催し物には、現在２種類あり、それぞれ１年に１回ずつ開催しています。初夏のころに「ことばのサロン」、晩秋のあたりに「言語文化セミナー」という具合です。

「ことばのサロン」は、本格的に始動する前段階として、2009年度に試験的にスタートし、今年度で３回目です。開催の目的は、「参加者の皆さんに日本語についておしゃべりを楽しんでもらおう」です。つまり、主催者中心ではなく、参加者中心の場にしようということです。「言語文化セミナー」は、講師の先生をお呼びし、お話を聞くというスタイルが多くなりがちです。もちろん、質疑応答の時間もとってはいるのですが、議論が白熱し、さあこれからというところで終わりという場合が多く、なかなか参加者からの意見を十分に伺えないのが現状です。時間がもう少しあればよいのにと思うこともしばしばですが、決められた時間枠がある以上、申しわけなく思いながらも、閉会せざるを得ません。

そこで、セミナーとは別の機会を作り、参加者の皆さん（特に、日ごろ研究所の活動にご協力くださっているLC倶楽部会員 の皆さん）に、日本語について、思う存分、心ゆくまでおしゃべりをしていただき、楽しんでもらえる場を設けたいと研究所は考えました。それが「ことばのサロン」です。

一方の「言語文化セミナー」は、平成４年度に始まり、今年度は第20回を開催することができました。過去の内容を簡単にまとめたものは、研究所のホームページ（http://www.mukogawa-u.ac.jp/~ILC/）にも載せていますし、一部、「LCりぽーと」として内容をまとめ、発行しているものもあります。

今回のリポートは、第３回「ことばのサロン」と、第20回「言語文化セミナー」との開催報告をいたします。また、セミナー参加者の皆さんから寄せられた「漢字に対する意見」も一部紹介します。

---

①一般の方々とことばを通して交流をはかる場。会員には刊行物の送付やセミナー開催のお知らせなどをしている。現在、会費無料。会員数153名。

■第３回「ことばのサロン」　テーマ「昔の決まり文句」
　2011年７月９日（土）午後１時30分～３時30分

昔から言われている「決まり文句」には、「夜、口笛を吹いてはいけない。ヘビが来るから／オニが来るから」とか、「霊柩車を見かけたら、親指を隠しなさい」、「夜に爪を切ってはいけない」なぜなら「親の死に目にあえないから」のようなものがある。また、昔は「火遊びをする子は寝小便をする」ということわざで火遊びを戒めたりした。

このような「決まり文句」は、本学の女子大生たちも、聞いたことがある、知っていると言う。つまり、ある程度の伝承性があることばだと言えるものだ。

しかし、その使われ方、頻度、使う時の意識などは、昔とまったく同じとは言えないようだ。「決まり文句」には、伝承性があるのか、ないのか。

サロンでは、まず、所長の佐竹から「ことばの世代間の断絶は起こりかけているのだろうか。もし、起こっているとするなら、どんなところに現れているのだろうか」という問いかけがあった。

参加者からはさまざまな意見が出た。マンション住まいだという参加者からは、「決まり文句」に使われているモノがなくなると、その「決まり文句」の意味が分からないのではないか、という話が出た。たとえば、和室がないと、畳や敷居に日常的に触れることがない。そうすると、それに関することばを使う機会がないというようにである。

また、核家族か、祖父母と同居かの別によっても違うのではないか、との意見も出た。同じことを注意するのにも、祖父母からだと「決まり文句」が使われ、親からだと直接的な物言いになるというわけだ。これに対しては、「子に対して、親は余裕がないが、祖父母になると余裕があるからでは」という意見もあった。企業の経営に携わっている方からは、「経営がうまくいっている会社は、祖父から孫へ家訓がうまく伝えられている。だが、親から子の場合は、反発してしまってうまくいかない」という興味深い話も出た。

「決まり文句」は、注意や指示、規制を直接的にするのではなく、間接的に言う婉曲表現である。だからこそ、そのことばを聞いて、“なるほど”と納得できるもの、理屈が分かるものが、次の世代へと伝承されていくと考えられる。そうでないものは、消えていってしまうのかもしれない。しかし、こういったことばを楽しむこと、面白がること、ことばで遊ぶこと、そして、知っているということは、私たちの生活における“心の豊かさ”でもあるだろう。その豊かさが、世代間の接着剤がわりとなり、コミュニケーションツールとなれば楽しいに違いない。

■第20回「言語文化セミナー」
2011年11月16日（水）午後２：00～４：00
講師：阿辻　哲次氏（京都大学大学院　教授）　　演題：現代日本の漢字文化
講演要旨（阿辻氏よりいただいた内容）

日本では戦後の「当用漢字」による漢字制限がおこなわれてきたが、コンピュータや携帯電話を使って日本語を書くことがいたるところでおこなわれるようになった結果、漢字制限論の論拠だった「漢字は機械で処理できない」という前提がくずれ、また「憂鬱」や「矍鑠」という難しい漢字も簡単に書けるようになって、人々の漢字に対する敷居が格段に低くなった。

電子機器の発達と普及によって、良くも悪しくも漢字に対する空前の変化がいまおきている。かつて「遅れた文字」とされてきた漢字はいま完全に復権をとげ、漢字に対する認識が確実に変化しつつある。

このような時代に漢字とどのようにつきあうべきかを考えてみたい。

阿辻氏は、漢字の特徴として、次のようなことを説明された。
・表意文字であること（漢字は一字だけで意味をもっている）。
・使用人口、使用面積が多い（中国と日本）。
・文化的な遺産が多い。
・縦書き、横書きが自由である。
・好きな漢字、嫌いな漢字のある場合があり、それに理由が伴っている（たとえばローマ字や平仮名などに好き嫌いがあることは考えにくい）。

また、日本語は、このような漢字のほかに、平仮名、片仮名、ローマ字を使い分けており、世界の中でも表記が特異であると指摘された。

2010年に告示された改訂常用漢字表や人名漢字表については、研究者と法律家との間には、漢字を扱う態度に大きな違いがあると話された。その例として、人名漢字の候補に挙がった「糞」が取り上げられた。法律家の主張は、漢字選定のための調査結果によって、人名漢字表の範囲に入った漢字であるならば、たとえそれがどんな漢字であっても例外を作らずに入れるべきだ、というもので、それに対して、研究者たちの意見は、人名に用いるとは到底考えられない漢字を入れることはおかしい、はずすべきだ、というものである。漢字１字であっても、立場が異なればとらえ方が全く違うという現場のやり取りを披露された（最終的には人名漢字表に入らなかった）。

学内外から40名以上の参加があり、質疑応答でも活発なやり取りが行われ、時間を少しオーバーするほどの意見交換が行われた。ひとつ興味深いことに、例年、言語文化セミナーには、女性の参加者が多いのだが、今回は、なぜか男性の方が多く、現代においても、やはり、漢字は「男手」なのだろうか、という感想をいだいた研究所である。

さて、セミナーでは、参加者を対象に漢字に関するアンケートを行った。以下、おもな回答をいくつかを紹介する。紙面の都合上、いただいた内容すべてを掲載することは不可能なことと、意図を変えない程度に、一部、表現に手を入れている箇所があることをご了承いただきたい。

《Q．日々の暮らしの中で、漢字があってよかったと思うことは？》

〔読む場合〕

ことばのイメージを的確につかめる　／　眺めるだけで意味が分かる
同音異義語の判別がしやすい　／　速読で意味がつかめる
初めて見る漢字でも意味をイメージすることが可能
今の電報は漢字が入っていて読みやすい（昔はカタカナのみ）

〔書く場合〕

真意を伝えることができる　／　漢字に思いを込めることができる
同音異義語は漢字で表すと誤りを防ぐことができる
漢字を使うと文字数が短くなり、紙面やメール文面の節約が出来る

〔その他〕

日本人の優秀さを証明できる　／　中国旅行の際に助かる

漢字があってよかったと思うことに関しては、「意味が分かる」という回答がもっとも多く見られた。これは、私たちの生活の中で、漢字が「読む」という言語行動に大きく役立っていることを示すものだろう。一方、「書く」ことについては、漢字に思いを込められる、文字数が節約できるなどの回答が見られた。

《Q．漢字があるために、面倒だなと思うことは？》

〔読む場合〕

難しい漢字は読めない　／　異なった読みをするのは面倒で嫌(理由をワケなど)
読み方が分からない人名がある（最近の子どもの名前は特に難解）

〔書く場合〕

難しい漢字は書けない　／　覚えるのが大変　／　年々、忘れていく
急いでいる時に時間がかかる　／　同音異義語の使い分けが複雑

〔面倒ではない〕

画数の多い漢字は調べることが楽しい　／　漢字は芸術だ
漢字は多く知っていれば知っているほど良い

アンケートに御協力下さった参加者の皆様、有難う御座いました。御蔭様で報告書を御届けする事が出来ました。御礼を申し上げます。（コレ、漢字の使い過ぎですよね）

担当：佐竹秀雄・岸本千秋　2012年２月
作業協力者：難波明日香